モンゴル帝国時代の史料に見える方位の問題
― 時計回り 90 度のずれが生じる要因 ―

村岡　倫

はじめに

モンゴル・元朝時代の漢籍やペルシア語史料において、内陸アジア地域に関する記述の中に、時計回りに 90 度ずれた方位感覚を示すものが、多く見られることはよく知られている。古くは安部健夫によって指摘され〔安部 1955〕、後に、大葉昇一が本格的にその原因を論じた〔大葉 1997〕。大葉は、漢籍、ペルシア語史料を著した東西世界を代表する知識人、例えば、虞集、蘇天爵、閻復、ラシード・アッディーン、カーシャーニーらが見ることができ、かつ、方位を誤っていたものとして、西アジアから中国に伝来したと確認できる唯一の地図である「回回図子」を挙げた。

「回回図子」とは、クビライ・カアン時代に編纂された『大元大一統志』に利用された地図の一つで、『秘書監志』巻 4 にその名が記されており、秘書監ジャマール・アディーン（扎馬剌丁）が西方から将来したものであった。元朝後期の政書『経世大典』掲載の地図「元経世大典地理図」の原本である可能性も指摘されるが〔胡 1986 : 36〕、現存しない。大葉は、「回回図子」の方位が時計回りに 90 度ずれていたと考え、それが東西で共通して誤った方位を記すことになった原因とした〔大葉 1997 : 27-29〕。しかし、この図の方位がずれていたというのは、「元経世大典地理図」の方位もずれていることを根拠にしているが、現存しない以上、明らかなことは言えない。そもそも、東西の知識人たちがみな「回回図子」を見たというのも推測に過ぎない。

ただ、大葉が指摘するように、東西の知識人たちが同じ誤りを犯したのは偶然の一致ではなく、原因が同一であることは間違いないだろう。本稿では、全く別の方向からその要因を考えてみたいと思う。もとより、方位を誤って記したのは何に起因するのか、直接明言する史料はなく、結局、私の見解も推測の域を出ない。今後も検討する必要はあるが、まずは一案を示し、大方のご批正をいただければ幸いである。

１．辺境における軍事報告はモンゴル語でなされた

安部が時計回り 90 度ずれた方位感覚を示す漢籍史料として挙げたのは、下記の二つであった。いずれも「カイドゥの乱」に関わるものである。

（１）『元史』巻 63、地理志、西北地附録、阿里麻里（アルマリク）の条

至元五年（1268）、海都（カイドゥ）叛、挙兵**南来**、世祖逆敗之於北庭（ビシュバリク）、又追至阿力麻里（アルマリク）、則又遠遁二千余里。

（２）『元史』巻 13、世祖本紀、至元 21（1284）年 3 月丁巳の条

皇子北平王南木合（ノムガン）至自北辺。王以至元八年建幕庭于**和林北**野里麻里（アルマリク）之地、留七年、至是始帰。

（１）について、安部は、至元 5 年にカイドゥが挙兵して「南」にやってきたというのは、実は「東」であり、（２）も、クビライの子ノムガンがカイドゥに対して、和林すなわちカラコルムの「北」のアルマリクに幕営を建てのは、正しくは「西」で、これらを「九十度ずれた奇妙な方位感覚」と指摘した〔安部 1955：81-82〕。

そもそも、これらの事件を報告した者はどのような人物であったのだろうか。どちらも軍事に関わることであり、辺境の出来事である。単純に考えれば、報告者はモンゴル軍人であった可能性が高いのではないだろうか。つまり、口頭でなされたのか文書であったのかはともかく、事件の経緯の報告は、彼らの言葉（モンゴル語）でなされ、それを漢語に翻訳されたものがそれぞれの記事であると想定される。大葉は、東西知識人の共通する誤りの原因を「回回図子」に求めたが、上記二つの事件は、虞集、蘇天爵、閻復などの知識人によって記されたものではない。モンゴル軍人が、報告の際にわざわざ「回回図子」を見て、それが原因で誤ったとは考えにくい。

では、報告がモンゴル語でなされたとすれば、方位についてはどのような単語が使われたのであろうか。まず身近な現代モンゴル語から考えてみよう。「南」と「北」を意味する現代モンゴル語はいくつかあるが、よく使われるのは、モンゴル国で使用されるキリル文字で表すと、「南」は「өвөр, өмнө, урд」などであり、「北」は「умар, хойно, ар」などである。ところが、前者はそれぞれ「前」という意味でもあり、後者は「後ろ」という意味でも使われる。モンゴル語学習者ならば誰でもが知っていることであろう。

漢語でいう「東西南北」は、遊牧民にとって古くからあった概念でない。護雅夫は、「古代チュルクにおいては、「東」「西」「南」「北」というような抽象的概念は、もともとなかったのであって、元来、それらをしめしあらわすものとして存在していたのは、「前」「後」「左」「右」という、より具象的な概念でしかなかったのである」と述べている〔護 1961：483〕。これは、後のモンゴルも同様であった。有力者が幕営で南面するモンゴルでは、その方向が「前」、反対側が「後ろ」であり、それが、そのまま抽象的な「南」「北」という概念を表す意味にも用いられ、現在に至っている。もちろん、「前」（つまり南）を見て右側が「西」、左側が「東」になるのは言うまでもなく、現代モンゴル語では、「右」と「西」は共に「баруун」、「左」と「東」は共に「зүүн」で、同じ単語を使うことも周知の通りである。

「前後」と「南北」が同じ単語であることを踏まえて、上記『元史』二つの記事を考え直してみよう。カイドゥ陣営は、クビライ政権から見れば西方であるが、概念としては「向こう側」、すなわち「後ろ」にある。そして、東方の自分たちの領域は「こ

ちら側」、すなわち「前」ということになろう。つまり、カイドゥが元朝領域内の北庭を攻撃した事件は、モンゴル軍人であれば、モンゴル語で「カイドゥが兵を挙げ、こちら側（前）にやって来た」と報告し、ノムガンのアルマリク幕営設立も、モンゴル語では「カラコルムの向こう側（後ろ）に幕庭を建てた」と報告されることになる。その際に使われた単語は、現代モンゴル語で言えば、「前」は「өвөр, өмнө, урд」など、「後ろ」は「умар, хойно, ар」などに当たる言葉であったのではないか。

そして、これらを漢人たちが漢語に翻訳する際、それぞれの単語を「前」・「後ろ」というような抽象的な概念ではなく、自分たちの方位を表す概念、「南」・「北」という意味にとったのではないか。実際は、カイドゥはやはり東に攻めてきたのであり、アルマリクはカラコルムの西にある。そうなると、後世それを読む者が、この記事の方位感覚は誤っていると認識してしまうことになる。モンゴル・元朝時代にモンゴル高原や西北辺境地域の出来事を記した漢籍に、時計回り 90 度ずれた方位感覚を示す例が多いのは、ここに原因があったのではないだろうか。

２．13、14 世紀における方位を表す語句

前節では、現代モンゴル語を念頭に、「前」「後」と「南」「北」が同じ単語であることが方位のずれの原因であることを論じたが、それは、13、14 世紀のモンゴル語においても当てはまるのだろうか。『元朝秘史』には、「前」と逐語訳される「額木捏」という語が頻出するが、これは、モンゴル語「emüne」の漢字音写である。実は、「額木捏」は、クビライ時代の至元年間に編纂された漢語とモンゴル語の対訳語彙集である『至元訳語』(『事林広紀』庚集巻 10 所収）の中の「方隅門」にも、「愛木捏」という音写で見え、「南」の対訳として載せられている。「emüne」は、現代モンゴル語のキリル文字表記で「өмнө」に当たり、前述の通り、「南」「前」両方の意味で使われる。

『秘史』には、小沢重男による全 6 巻にわたる精緻な翻訳・研究があり〔小沢 1984～1989〕、それぞれの巻に分けて、「元朝秘史モンゴル語辞典」が付されている（以下「小沢辞典」)。そこにも、この「額木捏」については「額木捏 emüne （前、前面）前（に)、南（に)」と説明されている〔小沢 1984：311〕。小沢が、「額木捏」の日本語訳として、「前」「南」両方を入れたのは、『至元訳語』を踏まえた上のことであろう。このような漢語・モンゴル語の対訳語彙集は、虞集、蘇天爵、閻復ら知識人はもちろん、ある程度の地位のある漢人であれば、誰でも見ることができたはずである。だとすれば、例えば、モンゴル語の話者が、「前（こちら側)」のつもりで、口頭あるいは文書で「emüne」としたものを、翻訳者が対訳語彙集により「南」と漢訳することはあり得ることである。

ちなみに、『至元訳語』の「北」は「兀木捏」である。明代初期の洪武年間に編纂された『華夷訳語』では「兀蔑列」と修正されているが、この語も『秘史』に見え、「小沢辞典」では「兀蔑舌列 ümere（北行、後）北に、後ろに」としており〔小沢 1984：

360〕、前述の現代モンゴル語の「умар」に当たり、現在でも「北」「後ろ」両方の意味に使われる。

一方、『至元訳語』は、「前」の対訳として「兀力荅」をあげている。これも、『秘史』には「兀舌里荅」とあって、「小沢辞典」では「兀舌里荅 urida（前、先、在前）以前の（に）：南の、前の」としており〔小沢 1984：348〕、現代モンゴル語の「урд」である。また、『至元訳語』の「後」は「懐剌」という対訳が付され、『華夷訳語』では「豁亦納」と修正され、この語も『秘史』にある。「小沢辞典」では「中豁亦納 qoyina（後、在後、後行）後に、後で」とあり〔小沢 1988：337〕、「北」の意味は記されていないが、『秘史』本文第 100 節にある「…中豁亦納察　孛速阿惕　亦舌列畢　必客額畢」の「中豁亦納察」が、逐語訳で「後自」（つまり「後ろから」）とあるにもかかわらず、小沢は、「中豁亦納察」を「qoyina-ča」と再構し、註で先行研究・翻訳を踏まえ、「《私は北の（後の）包から出てきました》が当を得た訳文である」と述べ〔小沢 1985：212、註 9〕、「“… 北（なる小舎）より起きて来れり我”と言いぬ」と訳した〔小沢 1985：210〕。この語は、前述の現代モンゴル語の「хойно」に当たり、今も「後ろ」、「北」両方の意味がある。村上正二は同じ個所を「北」ではなく、「家の後ろから」と訳している〔村上 1970：163〕。

また、現代モンゴル語では、「南側、（山などの）南側斜面」を意味する「өвөр」は、「ふところ」という意味もある。『元朝秘史』でも使われており、「額不舌児」と漢字音写され、「小沢辞典」には「額不舌児 ebür （懐）胸」とあるだけだが〔小沢 1984：305〕、小沢は、この単語が使われる 144 節の「阿勒台因 額不舌児」を「アルタイ（山）の南」〔小沢 1986：137〕、あるいは、195 節の「納忽 崑訥 額不舌児」を「ナクゥの崖の南で」と訳し〔小沢 1987：322〕、村上の訳も同様である〔村上 1970：315 および 1972：272〕。現在でも、漢語の「内蒙古」はキリル文字モンゴル語で「Өвөр Монгол」であり、「内側」言わば「こちら側」と「南」は同じ単語なのである。

以上のように、13、14 世紀においても、モンゴル語では、「前」「後」と「南」「北」は同じ単語が使われていた。このように見てくると、やはり、辺境のモンゴル軍からの報告で「前（こちら側）」、「後ろ（向こう側）」という語が使われた場合、それを漢人が翻訳すると、「南」、「北」となり得ることが理解できよう。

３．時計回りに 90 度ずれた方位感覚を示す漢籍の例

それでは、これまでの議論を踏まえ、（１）・（２）以外で、漢籍に見える時計回り 90 度ずれた方位感覚を示す例として、安部や大葉が挙げた記述を検証してみよう。

（３）『元史』巻 58、地理志、嶺北等処行中書省統和寧路総管府の条

世祖中統元年（1260）、遷都大興、和林置宣慰司都元帥府。後分都元帥府於**金山之南**、和林止設宣慰司。

この頃、金山すなわちアルタイ山脈の南側は、クビライと帝位を争ったアリク・ブケの支配が及ぶ地であり、クビライ側が宣慰司都元帥府を置いたのは、金山の「南」ではなく、「東」である可能性が高く、方位感覚のずれが見られる〔大葉 1997：22〕。

⇒ しかし、これを「南」ではなく、「前」と置き換え、クビライ政権の支配が及ぶ「こちら側」を表していると考えれば、方位に問題はなくなる。

（4）閻復「劉氏先塋之碑」(『益都金石記』巻 3)

復領侍衛軍万人、**北至金山**、屯田和林、安集帰化戸民所全活者数万余口。

出征した劉氏つまり劉国傑はカラコルムを根拠地とし、そこから見れば、金山は西方に位置する。ここに見える「北」も、正しくは「西」である〔大葉 1997：22〕。

⇒ 「北」を、カラコルムの「後ろ」あるいは「向こう側」と考えれば問題ない。

（5）『元史』巻 20、成宗本紀、大徳 5（1301）年 7 月

称海(チンカイ)至**北境**十二站大雪，馬牛多死，賜鈔一万一千余錠。

この北境は西境の誤りであり、これらの站駅は、実際はチンカイ屯田からアルタイ山脈に沿って西に連なっており、そうであればアルタイ山脈をはさんで元朝軍がカイドゥやドゥアの軍と対峙していた形勢と合致する〔大葉 1997：23〕。

⇒ 「北」を、「後ろ」あるいは「向こう側」と考え、「チンカイから向こう側（カイドゥ側）の境までの十二站」と理解すれば問題ない。

（6）虞集「句容郡王世績碑」(『道園学古録』巻 23、『道園類稿』巻 38、『国朝文類』巻 26)

〔大徳〕五年（1301)、海都之兵又**越金山而南止於鉄堅古山**。因高以自保。

カイドゥは、アルタイ山を越えてから、いったん南下して陣を敷いたというが、南に行くと、再びアルタイ山中に分け入ってしまうことになる。実際はカイドゥの兵はアルタイ山脈を越えてから東に進んだはずである〔大葉 1997：23〕。

⇒ 「南」を「前」とすれば、カイドゥの兵は「こちら側」に侵攻してきたことになり、大葉の言う通り「東に進んだ」ことになる。

（7）虞集「宣徽院使賈公神道碑」(『道園学古録』巻 17、『道園類稿』巻 40)

〔至大二年＝1309〕公（賈禿堅不花）徧歴**和林北**、金山・亢海・八児思闊等処。

金山（アルタイ山)・亢海（ハンガイ山)・八児思闊（バルス・コル）は、和林（カラコルム）の西方に当たるので、ここで言う「北」も「西」と見るべきである〔大葉 1993：55、1997：24〕。

⇒ （4）と同じく、ここの「北」も、「カラコルムの後ろ」あるいは「向こう側」と考えれば問題ない。

（８）蘇天爵「故少中大夫同僉枢密院事郭敬簡侯神道碑銘并序」（『滋渓文稿』巻 11）

今**和林北**、地宜麦禾。…… 和林寒苦、漢軍不能冬。若於蒙古諸軍、揀富庶強壮者戍辺、貧弱者数之稼穡、俟其有成、如漢軍法、以相資養。

元朝時代、モンゴル高原で知られている農耕が行なわれた屯田地は、チンカイ屯田、五条河屯田、ハンガイ屯田などで、いずれもカラコルムからみれば北ではなく、西方に位置している〔大葉 1997：24〕。

⇒ これまでと同様に、「北」を「後ろ」あるいは「向こう側」と考えれば、この記述も正しいことになる。

以上である。改めて見ると、「時計回り 90 度ずれた方位感覚を示す」と言いながら、記されているのは実は全て「南」「北」であり、「東」「西」は一つもないことに気づく。これらは対カイドゥ戦の軍事に関わる記事であり、問題は敵か味方かであった。報告が、「後ろ（向こう側）」と「前（こちら側）」、すなわち「敵側」と「味方側」に大別されたのは当然であり、現代モンゴル語で言えば「баруун」や「зүүн」など、「右」・「左」について記述する必要はなかったのである。

４.「高昌王世勲碑」に記された天山ウイグル王国の四至

しかし、安部が指摘し、大葉も「漢文史料のなかでもっとも規模の大きなずれを示した例」〔大葉 1997：19〕とする虞集「高昌王世勲碑」の天山ウイグル（西ウイグル）王国の疆域を記した部分には、「東」「西」に関する記述がある。この記事は、対カイドゥ戦など、軍事に関わるものではなく、ウイグル王国の四至を示すものであるから、これも当然のことであった。それによれば下記の通りである。

北：阿木（アム）河に至る
南：酒泉に接す
東：兀敦（コータン）、甲石哈（カシュガル）に至る
西：西蕃（チベット）に臨む

他に、方位に関しては「交州（カラ・コージョ）の**東に別失八里**（ビシュバリク）」あるいは「（カラ・コージョの）**南に哈密力**（カムル）」などの記述もある（周知の如く、「高昌王世勲碑」は諸刊本や原碑によって字句に異同が見られるが、上記の方位については、李 2009：64-65 掲載の残碑の拓影、『道園学古録』巻 24、『道園類稿』巻 39、『隴右金石録』巻 5 などでほぼ異同はない）。

安部、大葉が指摘するように、アム河は、天山ウイグル王国から見れば実際は西であるし、酒泉（粛州）は東、チベットは南である。また、ビシュバリクはカラ・コージョの東ではなく北であり、カムルも南ではなく東である。確かに、ことごとく時計

回りに 90 度ずれた方位を示している〔安部 1955：296-297、大葉 1997：19-20〕。

ただ、大葉も述べるように〔大葉 1997：19〕、「東」にあるとされるコータンとカシュガルについては疑問が残る。両地は天山ウイグル王国の領域の南西に当たるからである。時計回りに 90 度ずれた方位感覚では、チベット方面と同じく「西」と記されなければならないはずだが、ここにはやはり何かの過誤あるのだろう。両地は遅れて天山ウイグル王国の領域となったこともあり、それが影響しているのかもしれない。

いずれにせよ、コータンとカシュガルは別として、「高昌王世勲碑」に記される天山ウイグル王国の四至の方位の誤りについては、これまでと同じように考えれば解決する。ウイグル王国から見れば、モンゴル語で「前（こちら側⇒元朝側）」に位置する酒泉は、「南」と翻訳されることになるし、「後ろ（向こう側）」のアム河は、「北」と翻訳されることになる。チベットは、酒泉を前、アム河を後ろとして見た場合、右側であるが、モンゴル語で「右」と「西」が同じ単語であることはすでに述べた通りであり、「右側はチベットに臨む」が「西はチベットに臨む」と訳されたのであろう。

さらに、実際は、カラ・コージョの「北」にあるはずのビシュバリクも、酒泉を前、アム河を後ろと見た場合、カラ・コージョの左側にあり、モンゴル語で「左」と記されたものが、同じ単語であるために「東」と翻訳されたと考えればよいだろう。もちろん、本来カラ・コージョの東にあるカムルも、カラ・コージョより元朝側に位置するので、モンゴル語では「前」と表現されており、それが翻訳されて「南」となったのだろう。下記の図 1 を参照されたい。

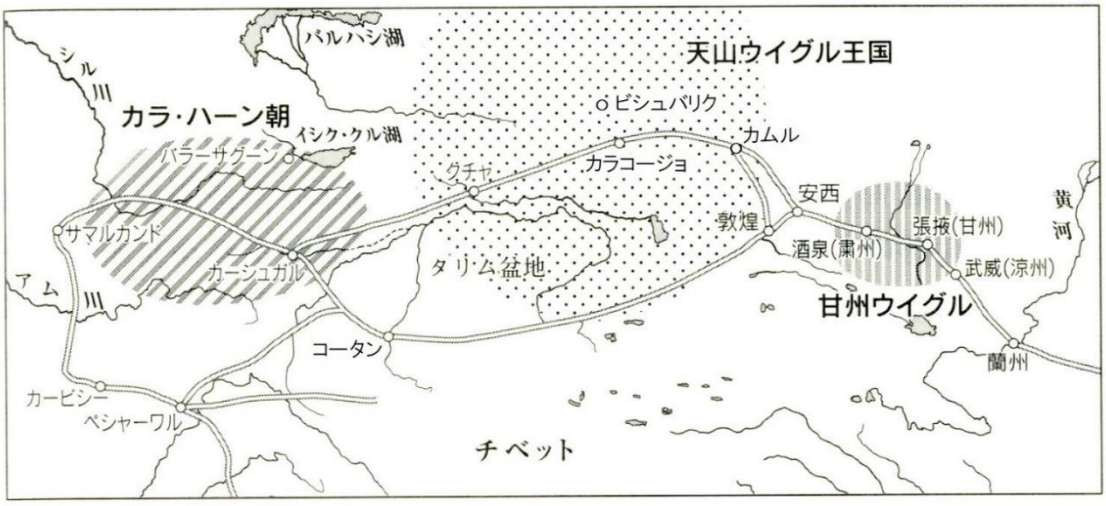

図 1　天山ウイグル王国成立時の中央アジア
（間野・堀川〔編〕2004：159 頁、一部改変）

ただし、「高昌王世勲碑」の方位については、別な注意が必要である。現存する碑石にはウイグル文の部分があるが、欠損部が多く、方位に関する個所も欠けていて見えない。ウイグル文があったとなると、当然、方位もウイグル語で書かれていたはずで

ある。前述の通り、護は、古代チュルクにおいて、「東」「西」「南」「北」というような抽象的概念はなく、それらを示す語は、「前」「後」「左」「右」であったことを述べたが、後のモンゴルと違い、「東」を「前」にし、その姿勢で方向を考え、「後ろ」の語で「西」、「右」の語で「南」、「左」の語で「北」を表した。それは、太陽の動きに合わせ、東の「日の生まれるところ」を「前」、南を「日の真中」、西を「日の沈むところ」、北を「夜の真中」と考えたからであるという〔護 1961：483〕。

つまり、これまで述べてきたモンゴル語の「前＝南」、「後ろ＝北」、「右＝西」、「左＝東」と違い、古代チュルクやウイグル時代の文献では、「前＝東」、「後ろ＝西」、「右＝南」、「左＝北」であった〔護 1961：484〕。これならば、ウイグル文献では、四至は結局、漢人の概念と同じくなり、誤りは生じないはずである。西ウイグル王国の領域は、「後ろ（西）にアム河、前（東）に酒泉、右（南）にチベット」、あるいは「カラ・コージョの左（北）にビシュバリク、カラ・コージョの前（東）にカムル」ということになり、実際の方位と同じになるからである。

しかし、「高昌王世勲碑」の成立は 1334 年であり、ウイグルがモンゴルに服属してすでに 120 年、モンゴル語の四至を表す概念が、ウイグル文にも影響したということは十分にあり得よう。この問題に関してはそのように理解しておきたい。

ここまで検証してきたことから、元朝時代、漢籍に記された辺境地域における方位について、どのように考えればよいのかを下記のように整理してみた。

漢籍に記された方位	使われたモンゴル語の単語	実際の方位
南	前（こちら側）	東
北	後ろ（向こう側）	西
東	〔前を見て〕左	北
西	〔前を見て〕右	南

このように、漢籍に見える時計回り 90 度ずれた方位の誤りは、モンゴル語の単語を介したことによって生じたと考えられるのである。

５．ペルシア語史料の方位

ここまでの言説はペルシア語史料にも当てはまるであろうか。ペルシア語史料で、時計回り 90 度ずれた方位感覚を示す記述としてよく知られているのは、『集史』の次のような記事である〔松田 1982：52、註(6)、大葉 1993：46、1997：19-21〕。

> **東北**〔の方面〕は、カイドゥとドゥアの側に接している。〈中略〉**最も東**にはカアン（ここはクビライを継いだ成宗テムル･カアン）の父母〔を同じくする〕兄弟である皇子カマラが軍を率いて駐屯する。彼の次にはカアンの娘婿ゲワルギス・キ

ュレゲン、彼の次にはクビライ・カアンの大アミールの一人であったトトガクの子ジュンクル、彼の次には同じく大アミールであったバヤン･クブクチの子ナンギャダイ、彼の次にはテムル･カアンの叔父ココチュ。そして、その次にはマンガラの子である皇子アーナンダが治めるタングート地方に到達する。〔彼は〕その地の軍を率いてチャガン･ノールに駐屯している。彼の次にはウイグル人の都市カラ･コージョの境界がある。その地には良質のぶどう酒がある。〔そこは〕カアンとカイドゥの境界であり、〔人々は〕両方に対して親密な関係を保ち、両方に奉仕している。彼らの次にはチャガタイの孫である諸王アジキとアルグの子チュベイが駐屯している［*ĞTS*,f. 208 a / ll.19-27］。

これは、クビライ晩年から成宗テムル時代の初期における元朝辺境防衛軍に関する記事である。モンゴル高原の戦線と河西（タングート地方）～ウイグリスタン戦線に大別されており、カマラからココチュまでは、モンゴル西部アルタイ方面の防衛軍を率いる者たちであり、安西王アーナンダ、チヤガタイ家のアジキ、チュベイらは、河西～ウイグリスタン方面の最前線に駐屯する諸王である〔大葉1993：47-49〕。

冒頭の「東北」は、時計回り90度ずれた誤った方位であり、実際は「西北」であるということは、これまでにも指摘されてきた通りである。ここもモンゴル語でまず考えるなら、「北」は「後ろ（向こう側）」すなわち「敵側」を言っており、実際は、敵方カイドゥ陣営のある西方を指し、「東」は、東方の元朝側を前に見て、「左」を言っているのであって、実際は「北」である。つまり、ここで言う「東北」は、モンゴル語では「後ろ・左」で、実際は「西北」であったと考えてよいことになる。

カマラが駐屯する「最も東」は、「最も左」であり、つまり「最も北」が正しいことは言うまでもない。そして、そこから南へと駐屯する者を順にあげ、モンゴル高原をさらに南下し、最後には、「諸王アジキとアルグの子チュベイが駐屯している」という地に至る。彼らが駐屯する河西地方からウイグリスタンに広がる地域は、これら駐屯軍の最南端で、『集史』テムル・カアン紀にも、「**最も西**にあるアジキとチュベイの拠点」という表現があり［*ĞTS*,f. 217a / l.5］、これも実際は「最も右」、つまり「最も南」であり、前のクビライ・カアン紀と符合する。

また、大葉が「広範囲にわたって方位のずれた例がみられる」と指摘した〔大葉1997：20〕、『集史』クビライ・カアン紀に見える元朝の領域の四至に関する記述がある［*ĞTS*,f. 208 a / ll.6-19］。整理すると下記の通りになる。

東南：ジュルチェ（女真）、ゴリ（高麗）、ジミング（日本）
東　：キルギス
南西：コンギ（広東）、ザイトン（泉州）
西　：カウジグー、カラジャン（雲南）
西北：チベット、ザルダンダン

このままでは、確かに時計回りに方位 90 度のずれがあるが、これまでの考えを当てはめてみると、下記のように変換できる。変換の過程がわかるように、「記述通りの方位」⇒「モンゴル語の概念による方位」⇒「**実際の方位**」の順に記す。

東南 ⇒ 左前 ⇒ **北東**
東 ⇒ 左 ⇒ **北**
南西 ⇒ 前右 ⇒ **東南**
西 ⇒ 右 ⇒ **南**
西北 ⇒ 右後ろ⇒ **南西**

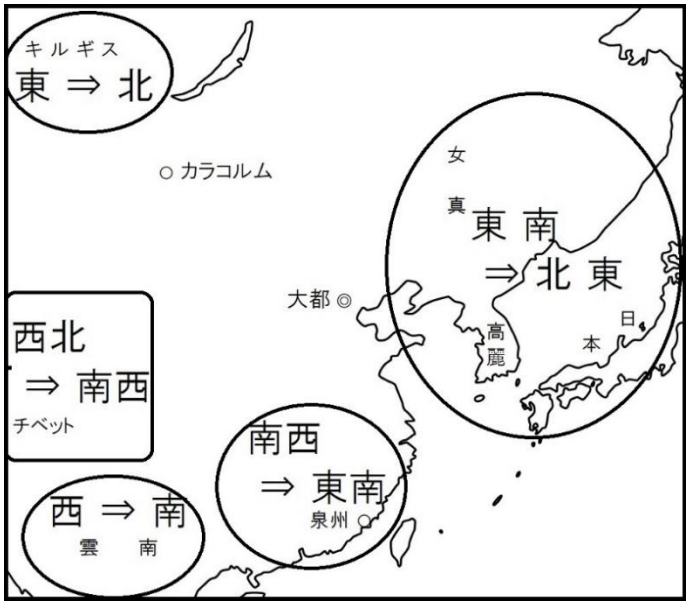

図2　元朝疆域の四至 『集史』に記される方位と実際の方位

これを図示すると、右の図2ようになろう。方位は全て正しくなることがわかる。また、大葉は、『集史』の方位のずれに対応するペルシア語史料として、カーシャーニーの『オルジェイト史』の記事にも注目した〔大葉 1993：56〕。

これについては杉山正明が詳細に研究し、1314年ごろの西北辺境の軍事状況を伝える重要な史料としている［杉山1987］。

そこに記される各方面の元朝駐屯軍は下記の通りである。

A カアン軍の**西と南**方面の前衛
　トガチ丞相の軍：夏営はイスン・ムレン方面、冬営はコブクの宿場
　ジュンクル王の軍：クンクルトゥとアライ・タ－ク
　チェベイの諸子ノム・クリとブヤン・ダシュおよびカバンの子コンチェクの軍：
　　河西地方の肅州の幕営地からウイグリスタン諸地方
B **東と北**方面、およびヒタイとナンギャスの疆域
　ブラルギの軍：バルス・コル
　カバンの息子の軍：カムル

これらの地域に駐屯する諸軍が、当時敵対していたチャガタイ・ウルス側の軍とそれぞれ対峙する情勢となっていた。先に挙げた『集史』冒頭の「東北（とうほく）」と違い、『オルジェイト史』では、イスタンブル写本を底本とした杉山の校訂を見る限り〔杉山 1987：337〕、「西南（せいなん）」や「東北（とうほく）」ではなく、あくまで

「西（にし）と南（みなみ）」、「東（ひがし）と北（きた）」である。いずれにしても、このままの方位では実際と合わないが、これまでと同様、A については、まず「南」をモンゴル語の単語で「前」すなわち「こちら側（元朝側）」と考えれば、イスン・ムレン（イルティシュ河）やコブク、アルタイ方面のクンクルトゥとアライ・タークは元朝側の領域であり［杉山 1987：343-347 頁］、方位は正しくなる。

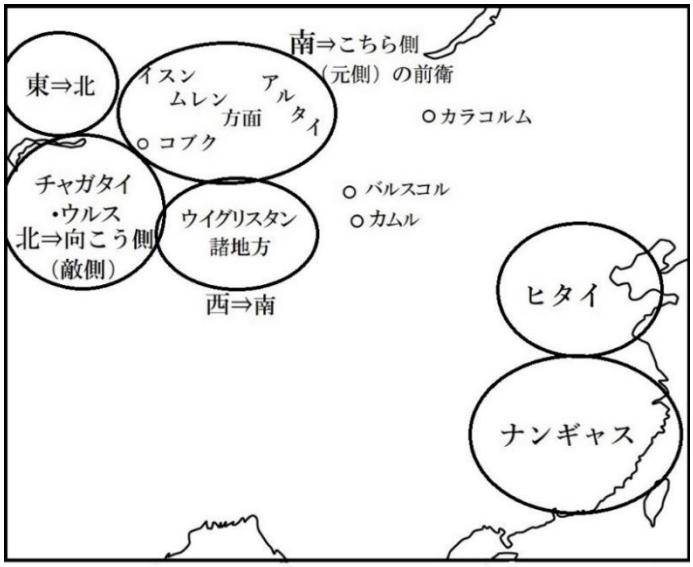

図3『オルジェイト史』に記される各方面の概念

同じように、「西」も、チュベイ一族が駐屯する河西地方は、前述のように『集史』にも「最も西」という表現があり、「西」はモンゴル語の単語で「右」、実際は「南」と考えれば、「肅州の幕営地からウイグリスタン諸地方」の位置としては正しい。Bの「東と北」も、「北」は「後ろ（向こう側）」つまり「敵側」であり、「東」も「左」で実際は「北」を指し、「敵側」と連なる地域を言っているのだろう。その敵の陣営とヒタイ（北中国）、ナンギャス（南中国）という漢地との境界地域にバルス・コル、カムルがあるということを表現していると思われる（実際には間にウイグリスタン諸地方が横たわる）。以上の説明を図示すれば図3のようになるだろう。

『集史』の編纂には、プーラード・チンサン（孛羅丞相）など、元朝から派遣されてやって来たモンゴル人高官の情報も反映されたと言われているが、その後に成立した『オルジェイト史』についても同様であろう。軍事に関わる出来事に関して、モンゴル語で「前後左右」で示された方位が、漢語への翻訳と同じように、ペルシア語でも「南北東西」と翻訳された。これこそが、東西の文献において、共通して誤った方位が示された原因だったのではないだろうか。

おわりに

以上のように、モンゴル・元朝時代の漢籍やペルシア語史料に見える、内陸アジア地域における時計回りに 90 度ずれた方位感覚を示す記述の原因は、方位を示すモンゴル語の単語と、それを翻訳した文献との差異であることを論じてきた。しかし、当時の文献が全てにおいてそうであったわけではない。大葉も、例えば、『長春真人西遊記』や常徳の『西使記』、プラノ・カルピニのジョン修道士の旅行記など、実見にもとづく記述による文献は、方位がだいたい正しく記されていると指摘する〔大葉 1997：

30〕。これらは、モンゴル軍人の戦線や辺境からの報告を翻訳したものではなく、自らが赴き、自らの言語で記した記録であり、当然のことであろう。

他にも、下記のような例がある。元明善「太師淇陽忠武王碑」(『国朝文類』巻 23)の次のような記事である(『元史』巻 119、博爾忽伝も同文)。

初、**金山南北**、叛王海都(カイドゥ)、篤娃(ドゥア)拠之、不奉正朔垂五十年、時入為寇。

一見すると、これまで述べてきたように、「南北」は、金山すなわちアルタイを挟んで「こちら側(元朝側)」と「向こう側(敵側)」という考え方をすれば、それはそれで問題はなさそうだが、この後に次のような記事がある。

又諸部既已帰明、我之牧地不足、宜処諸降人於**金山之陽**、吾軍屯田**金山之北**、軍食既饒、又成重戍。

これは、カイドゥの乱終結後の至大元年(1308)、当時西北辺境の防備の一翼を担っていたユチチャル(月赤察児)の上奏文の一部である。カイドゥ側の残党で、元側に投降してきた者たちがおり、牧地が不足しているので、彼らをアルタイの「陽」すなわち「南」に置き、わが軍はアルタイの「北」で屯田させてほしい、そうすれば軍食は豊かになり、重要な防衛の任務を果たすことができる、という上奏である。

時計回り 90 度のずれを考え、この「陽」が「こちら側」で、「北」が「向こう側」だとすると、ユチチャルは、降人をアルタイのこちら側に置き、自軍が向こう側で屯田するのを求めたことになり、戦略上、不自然である。

しかも、史料の上でもアルタイ南麓に屯田地があったという記録はない。ここで言う屯田とは、アルタイ最南端の山脈が東西に走る、文字通り「金山」の北側に位置するチンカイ屯田と思われる〔村岡 2003:40〕。だとすれば、ここは「北」で正しく、これに対する「金山之陽」もそのままでよいことになる。降人をアルタイの向こう側に置き、自軍はこちら側で屯田するという方が合理的な方策であろう(図 4 参照)。ここに記される「陽」と「北」が修正する必要はないとすれば、先にあった「金山南北」もそのままでよいのかもしれない。いずれにしても時計回り 90 度のずれは全てに当てはまるわけではなく、今後も文献ごとの検証は必要であろう。

図 4　「金山之陽」と「金山之北」

参考文献・略号

ĞTS : Rašīd al-Dīn, *Ğami‘ al-Tavarīh*, mss. İstanbul Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Rewan köşkü 1518.

安部健夫1955：『西ウイグル国史の研究』、彙文堂書店。

大葉昇一1993：「元朝中期における西北辺境軍の展開」『内陸アジア史研究』9、45-68頁。

―― 1997：「元朝,イル・ハン国の文献にみる時計回り方位九〇度のずれについて」『史観』137、19-34頁。

小沢重男 1984：『元朝秘史全釈』上、風間書房。

―― 1985：『元朝秘史全釈』中、風間書房。

―― 1986：『元朝秘史全釈』下、風間書房。

―― 1987：『元朝秘史全釈続攷』上、風間書房。

―― 1988：『元朝秘史全釈続攷』中、風間書房。

―― 1989：『元朝秘史全釈続攷』下、風間書房。

胡逢祥 1986：「《元経世大典地図》探源」『西北史地』1986 年第 1 期、35-37 頁。

杉山正明 1987：「西暦年前後大元ウルス西境をめぐる小札記」『モンゴル帝国と大元ウルス』、京都大学学術出版会、2004 年、334-370 頁（原載は『西南アジア研究』27、1987 年）。

間野英二・堀川徹〔編〕2004：『中央アジアの歴史・社会・文化』、財団法人放送大学教育振興会。

松田孝一 1982:「カイシャンの西北モンゴリア出鎮」『東方学』64、73-87 頁。

村上正二 1970：『モンゴル秘史―チンギス・カン物語―』1、平凡社〈東洋文庫〉。

―― 1972：『モンゴル秘史―チンギス・カン物語―』2、平凡社〈東洋文庫〉。

村岡倫 2003:「モンゴル西部におけるチンギス・カンの軍事拠点 ―2001 年チンカイ屯田調査報告をかねて―」『龍谷史壇』119・201、1-61 頁。

護雅夫 1961：「sičï と四至」『古代トルコ民族史研究』Ⅰ、山川出版社、1967、477-493 頁（原載は『和田博士古希記念東洋史論叢』、1961）。

李龍文〔主編〕2009：『蘭州碑林藏甘粛古代碑刻拓片菁華』、甘粛人民美術出版社。

（本研究は、JSPS 科研費 19K01040 および 18H00726 の助成を受けたものです）

（むらおか　ひとし　龍谷大学）